

韓 国 管 見 (2)

農林省 園芸試験場 蔬菜部長 西 貞夫

ナショナリズム(つづき)

ハングルの専用が、スムーズに行かない理由はいろいろあげられているが、心情的な側面としては、政府が一種の愛国運動として、国民精神統一の手段としてこれを進めようとしている、文化統制の一つであると文化人が反撥していることがあげられている。しかし現実の問題としては、前号でも述べたように、現在の韓国語が漢字と深い関係を、宿命的ともいえる関係を持っていることが大きく作用している。一説によると、辞典にある韓国語の52%が漢字であり、それら単語のハングル化が容易でないという。2000余年の間依存してきた漢字文化から容易に脱出できないというのが現実である。また韓国語は言葉の根本が“音”で成り立っているので、音の長短で意味が全く異なるという同音異語の問題が避けられず、ハングル表記ではその区別が不能といったことになり、先号に述べたように日領時代に初等教育を受けた人々は正確なハングル表記ができないということにもなっている。またハングルによっては概念的な造型力が弱まるので、思想的な発展が著しく弱まるということも心配されている。

これらの反対に対して韓国政府は、反対教授を解任したり、いわゆる御用学者に提灯持的な学説・研究を発表させたり(と反対論者はいう)して、一向にハングル化を弱める気配はな

い。それどころか、筆者が帰国の前日、ソウル市内観光の一時を持って訪れた有名な景福宮の正門である“光化門”の扁額までがハングルとなっており、きわめて奇異の感に打たれたことであった。単なる一訪問外人客にすぎない筆者が韓国の文化政策に批判がましいことを述べるのはまさに僭越以外の何物でもないが、この問題もさきにあげた朝日新聞の岡井輝雄記者のレポートでみると、全韓国主要都市の学生・一般人・公務員1,668人を対象とする世論調査で、ハングルの専用化に賛成81.6%、反対16.9%という数字になり、表面上は圧倒的な支持を受けていることになっているが、年齢別にみると、20才未満が賛成90.7%に対し50才以上では賛成が39%に減り、ハングル専用の時期については即時実施が56%、3年以内実施が13%となり、同時に漢字教育の必要性については54.9%が必要と回答し、ハングル・漢字共存の必要性をとる層の多いことが示されているということである。

このような事情のもとでなおハングル改革が進められているのは、それが民族独立精神の確立と結びつくものであって、外来語である漢字を追放して国語を尊重しようという、ナショナリズムのあらわれであるからであり、その背後にはその昔朝鮮総督府がハングルを目の仇にして取り締まったという歴史的事実があるという。

しかし最近訪日された筆者の友人の話では、韓国政府もその進め方の性急な点を反省されたようで、少なくとも街の看板などについては漢字の使用をゆるめる方向にあるということであるから、決定的な段階は未だ先と思ってよいのであろう。しかし周知のように北朝鮮ではすでに漢字は用いられていないとのことであるから、ハングル化は韓国人の民族的志向と解すべきことなのかも知れない。

筆者はハングル論争がもつ、ナショナリズムの発露としての面、世代間のずれをはしなくも明らかにした面、韓国人の激しやすく物事に徹することを求める性格を浮きぼりにしている面などを通して韓国と韓国人への理解をきわめて深めることができたように思った。

教育熱心

筆者が滞在中に感じた最も強烈な事実の一つは、韓国人の教育熱心ということである。その結果一流大学の入学難はすさまじいものがあり試験地獄はある面ではわが国以上とのことである。筆者は昨年6月に台湾も再訪しているが、この台湾でも一流大学への入学難は著しく、台北駅の周辺に予備校が軒を並べているのに驚いたが、多分日・韓・台の3国は世界有数の異常に教育熱心な国に属することであろう。台湾の場合には国自体のキャパシティが小さいので、大学卒業生といえども就職は容易でなく、むしろアメリカに留学するチャンスや資格を狙って一流大学に入るものが多いということであったが、韓国の場合はそこまで深刻ではなく(?)、社会全体の雇傭能力が未だ低いので、社会人となる時一流大学卒業ということはすでに大きなハンディキャップを非卒業者に負わせることになっている。しかし人口の都市集中がすさまじ

いので、入学の争いはすでに国民(小)学校からはじまっているという。わが国でも同様のことが一部で聞かれているが、一流大学に入るには、一流の中・高校のコースにのる必要があり、子供達が叱咤激励されることはいうまでもないが、そのための転宅(学区がきまっているので)や家庭教師の繁盛ぶりも周知のことである。小学校の3年生ごろからすでに受験勉強が始められており、学校差が都市と地方とで著しいため、ソウルなどへの集中はすさまじいものがあるという。たとえば筆者が宿泊したホテルの近くの国民学校では、児童の数が1万人をこえ、学級数が120を数えるのに対して教室が75しかないで、2~3部教授で切りぬけていると聞かされた。もっともこの複式教授は地方の国民学校でも同様で、釜山からソウルに戻る自動車では、常に車の通る道に国民学校の児童が集団で、あるいは三々五々歩いていたように記憶している。

このようにマンモス的な学校があるのは、人口と施設のアンバランスが根本原因であるが、同時にこれらがエリート校への第一ステップでありうるからで、越境入学者がきわめて多いことにもよっている。この学校の場合は20%が越境・違反入学児童であったとのことである。受験勉強が盛んであれば、当然私塾的なものや家庭教師が栄えることになり、わが国の場合と同様に、戦前は劣等児の手助けと思われていた家庭教師がむしろ誇らしい(頼む方もする方もともに)ものとなっている。筆者がつき合った友人のすべてがその子弟に家庭教師をつけていると語り、しかもその謝礼が相当程度家計を圧迫すると述べていた。家庭教師はご多分に洩れず教師の内職であるのが実情である。国民学校の6年生はほぼ全員(良い国民学校の場合)、

5年生でも90%は課外の私塾に通ったりしているというのであるから、教師の方もご多忙ということになって、中には荒稼ぎともいえる人物が出てくる。優秀な教師は引く手あまたで、学校から私塾に直行したりして、大学教授より収入の多いものも珍らしくないとされている。1か月の課外授業費はソウルでは1人3,000～5,000ウォン（ほぼ円と同じ）程度とのものであるから、その収入の大きいことは想像に難くない。

このようにすさまじいともいえる状況にありながら、とくに角韓国の父兄が教育熱心なのは現実に教育が最も確実な将来の保証となり、親が子に与えうるすぐれた遺産、あるいは言葉は適当ではないが最も有利な投資（子供にはねかえる）であることによっている。学校の設備や規模は、朝鮮戦争の痛手を被り、その後も莫大な国防費（直接的には国家予算の20～25%、間接的には50%近くに及ぶという）を支出する韓国経済のひずみから十分とはいえないが、戦前のわが国と全く同じつめ襟の制服を着て、制帽姿で黙々と通学する中・高校生の姿をみると、その後ろにある父兄の悲願にも近い期待が感ぜられて、つい物思いにふけることも多かった。

ソウル―釜山高速道路（ハイウェイ）

前回の訪問以後の顕著な変化の一つは、いうまでもなく、ソウルと釜山を結ぶハイウェイの完成である。もっとも最近では日本海と東支那海とを結ぶ横断ハイウェイも完成しつつあるとのことであるから、これが唯一のものではなくなったが、韓国の人々（少なくとも政府関係者）の自慢の種の施設である。その理由の第一は、その工事期間がきわめて短かったこと、次は

その工事費が他国の例に比べきわめて低廉であったこと、第三は諸般の事情によってその工事費の大部分を韓国が自らの手で賄ったこと、第四は工事の犠牲者がきわめて少なかったことなどである。

ソウルと釜山を5時間で結ぶ全長428kmのこのハイウェイは、1970年7月に完成した。幅員は1側が10～15mで左右分離が完全に行なわれた近代的な高速道路である。韓国では未だ自家用車の普及程度は低いので、わが高速道路のようなラッシュ現象は少なく、代わりに日・米製の大型特急バスが唸りをあげて釜山―ソウル間を往来している。道路はできたがサービスエリアにまでは手が回りかねているので、時々バス停に茶店的なものが出ているにすぎないが、用地は確保されているのでやがてはそれらも整備されよう。

この道路は100～120km/時で走行することが可能であるが、最短距離をとっているのでほとんどが山の間を縫う形になっている。総工費430億ウォンで、2年半足らずの工期で完成された世界でも例をみないものといわれている。目的はいろいろ考えられているが、その発端は有事の折に用いるということにあったように、それに加えてやはり朴政府が国の総力を結集して、その威信を示す事業として行なったということでもある。北朝鮮に対する警戒心については前号にも述べたとおりで、有事の折に軍隊を運ぶ道路が悪く苦戦した前轍を踏まないということのようであった。相当個所に（主要都市の近傍に）弾薬の貯蔵所が設けてあり、それらは有事の折にこのハイウェイで運ぶこともできるし、独立して戦闘することが可能のようにも配備されているとのことだった。ハイウェイを快適に飛ばしていると、突然道幅が広くなり、

中央分離帯がなくなって、鉄の柵が左右車線を分けるようになる。オレンジ色のストライプが道路一パイに何かを示すように描かれている。かねて聞いてはいたが、これは飛行機の離着陸に使うことができるよう配備されたものであった。釜山とソウルの間に計6か所あるとのことであった。朝鮮戦争の折、連絡機の発着をはばまれ苦勞した戦訓を生かして簡便滑走路にしたものとのことであり、自動車の速度と通過時間とから計算すると、いずれも約2000m程度であった。そのようなくろみが、実戦の折に果たして機能を発揮できるものかなどと、旧海軍の戦闘機乗りとしては疑ってもみたが、そこにもまた韓国のおかれている現実のきびしさが感じられて、むしろお気の毒にというような気分になった。

このハイウェイは工期の短いというのが特徴であり、同時にご自慢のようでもあった。その秘密はどうやら軍隊式の人員(?)管理と工事の進め方にあったらしい。各工区を区分して分担させて、担当者間で競争させるという形で工事を早めたとのことである。また工事の進捗を得意の軍隊式計画性で押し進めた結果であり、軍隊の工兵力も投入されたという。現在韓国の政策の根本は多くの人が紹介しているように、

“一面建設・一面国防”ということである。経済的な発展を計るために、国家的な土木工事を進めるという例は、わが日本国のオリンピックへの異常ともいえる熱の入れ方にもみることができるが、韓国でもそれが高層ビルのラッシュとなり、相次ぐハイウェイの建設となってあらわれている。このハイウェイ建設は資金の面では韓国の実力に余ると考えられたので、朴政府は外資の投入を求めたが、世界銀行からは先行投資にすぎると敬遠され、次に期待した日本も

一部の援助に止まり、結局自力で苦しい資金ぐりをして完成させたものであるという。その結果世界でもまれなほどの短期間・経済的な工事になったというが、その背後には土地の確保や買収に当たって、強権発動的な操作も加わり、安く提供させた土地と、安い労働力とがそれを可能にしたのだと韓国人の情報通の友は語っていた。いずれにしても現状では、はるかにわが国の高速道路より混雑が少なく、快適なドライブが可能であり、メンテナンス関係も十分行き届き、走行中にきわめてしばしば補修・整備に働く人々がみられた。わが国のハイウェイと比較し、瑕瑾をとらえてわが優位を誇ることも可能であろうが、韓国の人々がこの道路にこめている発展へのいのりにも似た願望を考える時、それが将来ともども軍事的に活用されることなく、産業の発展に役だつことを心から期待したい。

ハイウェイのソウル―釜山間の中心点近くに、殉職者の慰霊碑が建っており、また中心点には巨大な記念塔が建てられている。朴大統領がもろもろの思いをこめて、そこで完成式を催されたという記念塔には、工事についてのデータが彫りこんである。若干の煩を犯して紹介すると次のとおりである。

工事期間：1968・2・1～1970・7・7

全長：428km，幅員：32.4m（4車線）

横断している道路：465箇所

橋梁：（100m以下）281箇所

トンネル：6箇所（延長2004m）

所要資材：セメント 6632000袋

アスファルト 65000トラック

鉄筋 480700トン

鋼材 10900トン

特殊車輛 1650000台

切土 25,900,000㎡(岩765万㎡)

埋立暗きょ 394 箇所

所要人員：延べ890 万石

総工事費：429 億7 千3 百万ウォン

けだし、韓国にとっては近代式万里の長城というところであろう。その努力には頭が下がる。

民のこころ

筆者のように、第二次大戦前に教育を終った世代の人間は、韓国に対してある特殊な心情を持っているとあって良いであろう。一方ではいわゆる日本帝国なるものが、韓国および韓国人に対して（正確には南北朝鮮人というべきであろうが）犯したもろもろの罪悪に対して、恥じらいの気持を持っており、反面では、しかし俺はそれに加わったおぼえはないがなあという感慨を禁じ得ない。このことは中国人（正しくはこれも民族としての支那人であろう）に対する場合と同じであろう。しかし本多勝一の指摘をまつまでもなく、足を踏んでいる人間（加害者）は踏まれている人の痛みを知ることは決してできないし、踏まれた側にしてみれば、誰であろうと日本人にされたものであり、個々人としての日本人は好むと好まざるにかかわらず、そして又良きにつけ悪しきにつけ、日本国・日本人全体の後押しで行動していたことになるのだから、具合の悪い時にだけ桜井センリではあるまいし、オラ知ラネーというわけにはいかないことも明らかだ。日本からみる韓国・台湾はいかにも遠く小さい国のようにみえるが、韓国・台湾で（から）日本をみると、巨大な経済的エネルギーでひしひしと圧迫してくる“大国(?)”ということになるらしい。そこで韓国の人々にとってはこの日本のもつエネルギーはうらやましいものであるが、決して愉快なものではなく、

しばしばねたましいものともなり、警戒すべき相手とうつることになるらしい。貿易にしても経済的援助にしても、韓国の国益のためという名をとって、実質は日本に属するということが多いのも我慢のならないことであろう。そのあらわれとして、時々わが国の人々には理解のできかねる、あるいは正確にいうと心づかいが及ばなかったといわれる事件が起こる。筆者の帰国のすぐ後に、いわゆる日本人慰霊碑事件というものが起こった。これはソウルで死んだ無縁(?)の日本人の碑を、ソウルの市費の相当額をかけ、漢江河岸にたてたことに対して市民が反撥し、碑面を再三破壊したり、デモを組織したりして、遂に日本が僧侶を派遣して遺骨を引きとらざるを得なくなったという事件である。われわれにしてみれば、もう25年も昔のことであり、死者のことだから、その骨を埋めようとした地に慰霊碑くらいよいではないかと安直に考えやすい。しかしソウルの市民にしてみれば、なぜソウルの市民が経済的な逼迫に耐え、不自由な生活を送っている時に、死者の為に公費を費して碑などを建てねばならないのかということになり、それがエスカレートすると、しかもわれわれを苦しめ搾取した日本人の墓をなぜ公費で建てるのか、思い起こせその昔の屈辱を、ということになる。その結果、きわめて血の上りやすい（と日本人は考える）一部の人々が破壊行動に出たというのが事件の大筋である。しかしこの事件の背景には少なくとも、ソウル市民の満たされざる欲求不満への怒り、日本人のわがもの顔な韓国での行動、そしてそれから連鎖的に思い出されるいにしえの不幸な状態という屈折があり、今さらのように、われわれの思考がいかに自己中心的であったと思い知らされる事件なのであった。

戦後に教育をうけ、むしろ戦後のわが国経済の一面をいわゆる第三国人として大いに牛耳った韓国の人々しかみていない、若い世代の日本人は、このように聞かされてもわかりかねるかも知れないが、韓国に住む若い韓国人（特に教育のある）は、日本をうらやましいがずるい国と考え、朝鮮戦争の特需が日本経済の奇跡的な回復のモメントとなったことを忘れない。政府の方針もあって、表面上は反日から知日への歩みをつづけているようではあるが、決して親日ということではない。それは又われわれが決して知韓でもなければ、真に親韓的でもないことの反映であると考えるべきであるから、今後訪韓し、あるいは韓国の人々と交渉をもつであろう人々の肝に銘じておくべきことでもあろう。

民の楽しみと悲しみ

韓国が現在臨戦体制的な姿勢を保ちつづけているということは、すでに再三述べた。そのことはいうまでもなく国民経済を相当に圧迫しているし、一般の市民に重苦しい感じを与えていることも否定できない。それに加えて、韓国民の生活には、都会と農村でその重さに相当の差があるが、儒教的・家父長制度的な力が大きいのかかっており、ある面では秩序維持に大きな働きを果しているが、反面人々にやり切れないという感情を持たせる原因ともなっている。韓国の知識人が指摘するように、現在の韓国にはその発展をはばむ三つの悪があるという。その第1は“北朝鮮の侵略の脅威”とそれからエスカレートして生ずるもろもろの無益な浪費、第2は慢性化しているといわれる“公務員の収賄と職権乱用”，第3は“頹廢的な社会風潮”であるという。しかしながら、この第3の風潮なるものは、わが国のそれに比べると、現象的

には日本人からみてきわめて未だ健康的なのである。ミニスカートは流行しても映画の中のモードは未だ論議の対象とされて自由ではない。TVはあるが茶の間にまで性交場面を配給するほどにご親切ではない。ボーリング場は外人目当てのウォーカーヒル以外には一軒もない。戦争映画はきらわれて成りたたない。というように大正生まれの筆者から見ると何が頹廢しているのか外からはわからないようなものであるが、韓国の人から見ると社会的なモラルの、あるいは家庭内の長幼序あり的秩序の急速な低下あるいは変転が嘆かわしいのだという。上長の前では膝行し、タバコも酒も手にしないということが今でも守られようとしているのであるから無理ないともいえる。筆者の試験場に留学しておられる韓国の研究者が、某日某TVの11時番組を偶然みて、びっくりしてスイッチを切った（2回目からは知らないが）といわれたのは真実のことであろう。もっとも台湾では蔣総統におみせするために、毎金曜日の夜2時間以上にもわたって京劇が放映されているのであるから、スイッチを切るにも土地柄があるということになる。そこでいかに臨戦体制下にあるといい、政府が精神作興的な努力をしたとしても、実質的な生活の苦しさが十何年もつづき、しかも今後いつになったら緩和されるという見通しもないというのでは、一般の民は何かにはけ口を求めるということにならざるを得ない。そして日本の水準から見るときわめて娯楽的施設といわれるものの少ない国であるから、着ることと飲み食いにも楽しみを見いだすということが多いようだ。週末はとくに著しいが、ソウルの近くにある幾つかの谷間には若い人がキャンピング場をつくり、より年をとった人は相集って宴を張る。女の人酒をのんで踊り楽しむ。独特

の太鼓を持ちこんでにぎにぎしく騒ぐ。酔い痴れてわれを忘れんとし、つかの間の精神的エネルギーを回復せんとすること、われら日本人公務員と異ならないが、その頻度がきわめて高く、その程度はきわめて徹底しているということである。放歌高吟に止まらず、喧嘩口論になる(もっとも手を出す人は少ないという国民性のようなこと)も多いという。いわゆる観光地に行くと、必ず松林の中や木かげに10数人の人々が集まって車座となり酒宴をしている。ずいぶん韓国人は宴会がおすきですねなどとはじめはいていたが、やがてはこれが生きるための楽しみなのだと悟って、当方はうら悲しい気分になってしまうのであった。

町の中に流れるメロディーは全くの日本調である。しかも哀愁を帯びたものが多い。もっとも中には海賊版的に、日本の歌のメロディーを盗んだ(?)ものまであり、最近は取締りが強化されているという。日本調のメロディーが韓国人の心情に相通ずるということに止まる間はいいが、それが日本に対するある種の憧憬のようなものになることを韓国当局は大変警戒しているのである。経済的な下風には不本意ながらついたとしても、精神や心情においては独立自主でありたいという主張であろう。歌詞はもちろん筆者の一語すら理解できないものであるが(日本語歌詞は禁止)、韓国人の友に聞き、帰国してから物の本で知ったところによると、わが国の歌謡曲と同様、涙・夜・別れ・恋・あわれ・星・風・花・波止場・夢・ふるさと・雲・空・山・雨・峠・恨み・つらい・苦しみなどという単語のつなぎ合わせで成り立っており、今更のように古来の韓国文化の影響が日本人の心情を大きく支配している(!!?)かに感銘した。哀愁・哀感といったムードに対して、もっと近

代的で明るいメロディーも生まれているとのことであるが、大衆のし好がその生活感情や生活条件の表現でもあるとすれば、当分の間は前者にとって代わることはむずかしいであろう。

韓国の都会と農村とが、あらゆる面で隔絶していることは再三述べた。農村の貧しさが都市の外見的な喧騒につながっていることも多くの人が指摘している。農村には都会に比べて、さらに娯楽的な施設は乏しく、まずは皆無といってよい所もある。野菜産地を見学し、あるいは観光をすませて夕方宿舎に向かう途中、暗くなった農村を通ったり、都市の中心部から少しはなれた民家をすぎることがある。そうすると突然暗闇の中からライトに照らされて白い衣服のグループが腰を下ろして現われる。さきにも述べたように、農村の大部分は未だ電灯に恵まれていない。灯油はできるだけ節約したい。そこで夏は戸外ですごせるだけすごしていようということになる。そしてその場が人々のコミュニケーションの場となり、エンターテイメントを提供する民のいこい所ともなっている。井戸端会議の場ということである。夏はとも角として冬はどうなるのであろうか。韓国の気候は多分に大陸性であると聞いている。電灯のないことと娯楽の乏しいことが農村人口の増大に結びついているとも聞かされたけれども、筆者からみると、何とわが日本人は忍耐力からも勤勉からも速くなったものだろうということでもあった。

韓国の研究者

筆者の今回の訪問は、韓国園芸学会の招きによるものであったが、縁あって興農種苗・中央種苗という二大種苗会社の農場を訪問することができた。筆者の専門は育種であるから、他の部門の研究者のことについてはあまり知る機会

がなかったが、品種改良に限っていえば、種苗会社の研究者はその大部分が園芸試験場からの転職者であった。それらの人々は学会においても相当に認められる実力を持っており、研究費においても時には官公機関よりも恵まれているようであった。特に印象的だったのは、その俸給の差が大きいことである。試験研究機関はしばしばその不正行為が指弾される公務員の中にあって、潔癖さをもって信頼されている。公務員の不正行為はしばしば行政監察の対象とされ、全公務員数に対して年平均1.3%程度の発生率（岡井輝雄氏による）であるが、その3分の2以上が中央官庁をめぐるのであり、農林部は国防部、保健社会部、交通部について4位となり、つづく財務部、商工部をしのごとされている。これらの不正の多くは、生活費に当てた

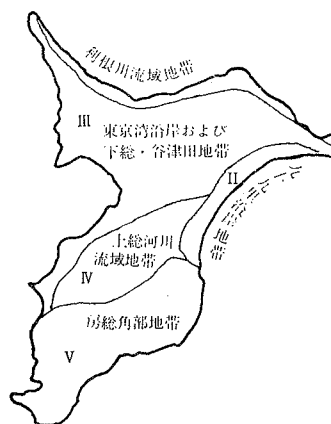
めであって、これを防ぐには給与制度の改善こそがむしろ必要といわれるのであるが、研究機関とくに園芸試験場は、園芸の農業中での地位を反映してか、不正行為と縁がないことでほまれ高いという。しかし園試の科長クラス（日本の部長に当たるか？）でも月に6～5万ウオン、場長でも8万ウオンという給与では、いかに物価が安いといっても、生活の困難であろうことが察せられる。これらクラスの人々には、政府の承認を得て大学講師を兼ねることなどが、家計の助けとなりうるということであるけれども、もっと若い3万ウオン程度の月給のみに頼る若い研究者の場合は、よりよい給与条件があれば喉から手が出る思いになるのは当然であろう。（この項つづく）

千葉県における水田多年生雑草

千葉県農業試験場水田作研究室 山岸 淳

近年水稻作において多年生雑草の増加がいちじるしく、その防除が全国的な問題となっている。多年生雑草がこのように増加してきたのは、早期・早植栽培や直播栽培など新しい栽培法の普及、裏作の減少などにより多年生雑草の生育に好適な条件があたえられたこと、さらには1年生雑草防除技術の進歩により手取り除草や機械除草が省略されるようになったことなどが、その原因としてあげられている。

千葉県では1950年より早期栽培が導入され、



第1図 地帯区分図